

日本現代写真の一断面——女性写真家たちを中心に  
飯沢耕太郎(いゝざわ・こうたろう、写真評論家)

日本の写真表現は1980年代末～1990年代初めに大きな変わり目を迎えた。この時期、公立の美術館が写真を本格的にコレクションし、展覧会を開催するようになる。1988年には写真部門を持ち専門の学芸員を擁する川崎市市民ミュージアムが、89年には同じく横浜美術館が、そして90年には東洋で最初の写真・映像の専門美術館である東京都写真美術館が開館した。またこの時期には、東京、横浜、京都、大阪などの各都市に写真を専門に扱うギャラリーができ、写真作品の売買が本格的におこなわれるようになった。

それまで日本の写真家たちは、雑誌や写真集などの印刷媒体を中心に作品を発表していた。また例外はあるものの、その多くは現実世界をストレートに写し出すドキュメンタリー・フォトであった。ところが、この時期に登場してきた写真家たちはそのような固定した枠組みから大きく逸脱する動きを展開していった。大学の美術学科に席を置き、もともとは絵画、彫刻、グラフィックデザインなどを専攻していた者たちは、壁に平面的に写真を並べるのではなく、より自由に空間全体を構成するインスタレーションを積極的に試みた。彼らの登場によって、現代美術と写真との境界線はほとんどなくなり、自らのコンセプトによって世界を再構築するような作品が増えてくるようになる。

もう一つ、この時期に目立ってきたのは、女性の写真家たちの活動である。日本の社会は1970年代までは保守的な傾向が強く、女性がクリエイティブな職業に就くのはむずかしかった。写真も例外ではなく、プロフェッショナルの写真家のほとんどは男性だった。ところが80年代後半以降、写真を学び、それを職業にしたいと考える女性の数が急増してくる。90年代になるとその傾向にはさらに拍車がかかり、大学の写真学科や写真専門学校では学生の男女比率が完全に逆転する。さらに若い写真家の登竜門である幾つかの写真コンテストで、上位入賞者のほとんどが女性で占められるという現象も起こった。

なぜ女性写真家たちがいっせいに登場してきたのだろうか。操作が簡単な小型カメラやデジタルカメラが普及し、どちらかといえば機械が苦手な女性でも気軽に撮影が楽しめるようになったということがある。また女性の社会進出の動きが強まり、自らのアイデンティティーを強く主張するようになったということもあるだろう。写真は彼女たちの「自己表現」にぴったりのメディウムだったのだ。いずれにしても、彼女た

ちの軽やかで自由なスタイルは、硬直化していた日本の写真表現の世界に新しい風を吹き込むものだった。HIROMIX、長島有里枝(ながしま・ゆりえ)ら、20歳代前半の女性写真家たちの活躍ぶりは社会現象になり、「女の子写真」(girly photo)という言葉が流行するほどだった。

だが1990年代後半以降には、女性写真家たちのブームも下火になってくる。というより、彼女たちの存在が見慣れたものになり、単純に女性だからということで珍しがられ、もてはやされるような時期は過ぎてしまったということだろう。2001年にはHIROMIX、長島有里枝、蜷川実花(にながわ・みか)の3人の女性写真家が、日本の写真界で最も権威のある賞の一つである木村伊兵衛写真賞を同時受賞して大きな話題となる。だが、それは彼女たちの写真が社会的に広く認知され、当初の新鮮な輝きを失ってしまったということも示していた。

それでも何人かの女性写真家たちは、粘り強く自分の作品の世界を追求し、ユニークな作品を発表し続けている。ここではその中から3人の仕事を紹介することにしよう。

蜷川実花は1990年代以降に登場した日本の女性写真家のシンボルともいえるべき存在である。96年、多摩美術大学グラフィックデザイン科在学中に若手写真家の登竜門として知られる「第7回写真ひとつぼ展」(リクルート主催)でグランプリを受賞してデビューする。その後の活躍は目覚ましく、98年の『17 9 '97』を皮切りに2006年まで12冊の写真集を刊行し、雑誌にモード写真、ポートレートなどを精力的に掲載して日本で最もポピュラーな写真家の一人になった。個展、グループ展などの開催も多く、2005年には海外での最初の個展「MIKA NINAGAWA PHOTO EXHIBITION IN LONDON 2005」をロンドンで開催している。

蜷川の父は日本を代表する演出家、蜷川幸雄(にながわ・ゆきお)であり、彼女は明らかにその演劇的な才能を受け継いでいる。モード写真の撮影のような演出を必要とする場面だけでなく、旅の途上に撮られたスナップショットなどでも被写体をコントロールし、画面に巧みに構成していく能力が高い。2007年公開の江戸時代の遊郭・吉原を舞台にした映画『さくらん』では、監督と撮影を担当し、新しいジャンルに挑戦するとともに、持ち前の演出力にさらに磨きをかけようとしている。

だが蜷川のトレードマークといえば、何と云ってもその華麗な色彩感覚だろう。目がくらくらするような原色の氾濫は、初期から一貫して彼女の写真を特徴づけている。花、蝶、金魚などをクローズアップでとらえた作品を見続けていると、不定形の原色

のファルムが重なりあい、ひしめき、うごめいている「小宇宙」に包み込まれているように感じる。それは彼女の脳内のイメージを直接スキャンしているような、奇妙に生々しく、エロティックな体験である。

蜷川の新作「永遠の花」(2006)では、メキシコ、南太平洋のグアム島、サイパン島などの墓地に手向けられた造花を撮影している。これらプラスチックでできた「永遠に枯れない花」は、もともと彼女の作品の中にあつた人工性、非現実性をより強調する被写体といえるだろう。その色彩感覚は暴力的なほどにエスカレートし、毒々しく、グロテスクなイメージが画面からあふれ出してくる。生と死とが一つに溶け合う場所に咲き乱れるいびつな花々を、標本箱のような空間におさめたこのシリーズは、これから先の蜷川の方向性をさし示す重要な作品になっていくのではないだろうか。

澤田知子(さわだ・ともこ、1977～)は、「写真ひとつぼ展」とともに1990年代以降の日本の現代写真の動向に強い影響を与えてきた公募展「写真新世紀」(New Cosmos of Photography、キヤノン主催)からそのキャリアをスタートさせている。2000年に「第21回写真新世紀」で特別賞を受賞。この時に出品したのが、滋賀県の成安造形大学在学中に制作され、のちに写真集としても刊行される「ID400」だった。

このシリーズは、鉄道の駅前などに置いてある身分証明書用の撮影ブースを利用した作品である。このブースでは一度に4枚の写真が撮影できるのだが、澤田は服を着替え、メーキャップを工夫し、ヘアピースなどを使って髪型も変えて、400通りの女の子に変身する。ここには自己のアイデンティティーを最大限に拡張し、どれだけ多くのキャラクターに成りきることができるのかを追求するという澤田のオブセッションが、最もストレートな形で表現されている。それとともに澤田のこのシリーズは、外見だけですべてを判断してしまう日本人の伝統的な女性観を、軽やかに批評しているともいえるだろう。

澤田はその後、やはり日本特有の習慣である「お見合い」(結婚前の男女がセットされた出会いの場に参加する)のための写真を、30通りのキャラクターを使い分けて撮影した「OMIAI♡」(2002)、主婦、女性警察官、旅館の女将などさまざまな職業の女性を演じる「Costume」など、次々に意欲的な作品を発表していく。2004年には日本の木村伊兵衛写真賞とアメリカのICP Infinity Award for Young Photographersをダブル受賞し、ニューヨークのZabriskie Galleryをはじめとして、海

外でも展示の機会が増えてきている。

「School Days」(2006)はその澤田の新作の一つである。このシリーズも彼女の他の作品と同様に、日本人なら誰でもよく理解できるフォーマットで撮影されている。女子校のクラス写真である。毎年4月にこういう集合写真を撮るのが日本の学校の定例行事になっている。澤田はこの作品で初めてコンピュータ・グラフィックスによるデジタル処理を徹底して用いて、クラス全員、そして先生に成りきっている。一人ひとりの顔つきや体型など、細部まで凝りに凝った画像を見ていると、おかしさとともになぜか恐怖の感情が湧き上がってくる。「笑い和不気味さ」が共存する澤田知子の作品世界が、完全にできあがったことを示す傑作といえるだろう。

安楽寺えみ(あんらくじ・えみ、1963～)は蜷川実花や澤田知子のように、20歳代で華々しいデビューを飾ったわけではなく、どちらかといえば遅咲きの写真家である。幼少期から病弱だった彼女は、1980年代に武蔵野美術大学で油絵を学ぶが、体調がさらに悪化し、脳に障害が出て、10年あまり寝たり起きたりの闘病生活を送る。だがこの時期に、蝶の蛹がじっと羽化の時期を待つように、独自のイメージーションの世界を守り育てていった。

1993年頃から銅版画の制作を開始し、97年頃からは写真を本格的に撮影して、手作りの写真集にまとめ始める。その数は2006年までに40冊以上に達した。2003年、「ホワイトキューブKYOTOフォトコンテスト」で大賞を受賞する。この時の作品は、2005年に最初の写真集『HMMT?』(スタジオワープ)として刊行された。同年、横浜のBank Art Studio NYKで、最初の本格的な個展、「TOADSTOOL」を開催。2006年にはニューヨークのM.Y.Art Prospectsで個展を開催するとともに、写真集『Anrakuji』(Nazraeli Press)を刊行するなど、急速にその存在感が大きくなってきている。

安楽寺の作品世界は、複雑に絡み合いながら枝分かかれし、増殖していく性的なイメージの集積である。男性器、布の裂け目、舌や唇、切り抜かれた人形、女性の裸体(ほとんどはセルフ・ポートレート)、膨らんだ風船などから成るそれらの集合体は、見る者を揺さぶり、挑発する魔術的なエネルギーに満たされている。苦痛とエクスタシー、聖と俗、生真面目さと遊び、シニカルさとコミカルさなど、まったく相反する要素がせめぎあい、混じりあって、彼女にしかブレンドできない不思議な味わいの飲み物が生まれてくるのだ。

日本の場合、性器を直接的に写真で表現するのは、現在でもタブーとされて

いる。それゆえ国内では写真集でも写真展でも、安楽寺の作品世界をストレートに発表するのはむずかしい。だが、アメリカやヨーロッパでの展示や写真集の刊行によって、日本でも性表現の制限が緩んでくるのが期待できるかもしれない。その意味でも彼女の今後の活動からは目が離せない。

蜷川、澤田、安楽寺だけでなく、日本の女性写真家たちはそれぞれ世界的に見てもユニークな作品世界を構築しつつある。ぜひこれから先も彼女たちの活動に注目していただきたい。